

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	荻田 千愛
論文担当者	主査 金澤 伸雄
	副査 木島 貴志
	副査 丸茂 幹雄
学位論文名	Effectiveness for remission maintenance rate and safety of different rituximab regimens for treating anti-neutrophil cytoplasmic antibody-associated vasculitis in Japan: A J-CANVAS study
論文審査の結果の要旨	
<p>本研究は、多施設共同研究において、抗好中球細胞質抗体関連血管炎（AAV）の治療開始 24 週間後に寛解を達成した 57 人の患者を対象に、治療開始 48 週間後の寛解維持率、感染症の発生率から、リツキシマブ（RTX）の有効性、安全性を解析した観察研究である。</p> <p>RTX は AAV の寛解維持に有効であることが報告され、重症例だけでなく、軽症、再発、新規発症の症例にもシクロホスファミド（CY）と同等に推奨されているが、RTX と他の免疫抑制剤との比較研究に比べ、RTX を使用した症例に限定した比較研究での RTX の投与時期や投与間隔の違いが、寛解の達成や維持に影響するかについての報告は限られている。</p> <p>結果として、48 週間後の寛解維持率は継続投与群の方が非継続投与群より高かったが、有意差は認められなかった。感染症の発生率は、継続投与群の方が非継続投与群より低く、維持期からの群との比較において有意差を認めた。RTX の継続投与によりステロイドや免疫抑制剤の併用が減少することで、感染症のリスクを軽減する可能性がある。寛解導入期における RTX 投与回数と長期的な寛解維持の関連は明らかではなかった。なお、多変量回帰分析では、RTX の使用と 48 週間後の寛解維持との間に関連は認められなかった。ただし、対象患者背景にステロイドや他の免疫抑制剤の併用があり、治療条件が一貫していないことから、RTX 単剤での比較とは言えないことに注意が必要である。</p> <p>結論として、AAV の治療開始 24 週間後で寛解した症例を対象に RTX の継続投与と非継続投与を比較した場合、寛解導入期の RTX の投与が、維持期での投与や RTX の累積投与量にかかわらず、48 週間後での寛解維持に影響を及ぼす可能性があることが示された。</p> <p>この結果は AAV の臨床において重要な知見であり、学位に値すると判定する。</p>	